
アイドルっ!1

初心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドルっ！1

【Nコード】

N4833U

【作者名】

初心

【あらすじ】

小学生の少年優也は履歴書を勝手におくられたアイドルオーディションに受かってしまい、アイドルとして活動することに。アイドルとして活動する中で優也が学んだこと

6月

俺はスタジオのごちゃごちゃした人たちのなかにいた。

みんな、監督のまえで演技したり、ダンスしたり。

オーディションってやつ

俺なんか分かるハズない。音痴だし、他みたいにイケメンでもないし、背もそんなに高くない。

だいいち、俺が望んで来たわけじゃない。

ねーちゃんが勝手に履歴書送った。

『優也はカッコいいよ？自信もちなってー』

無理だよ、自信なんてもてねーよ。

俺の順番が
きた

「番号、名前、アピール3分ね」

「129番木村優也です。」

そのあと、自分がなにを言ったのかも、何をしたのかもあんまりおぼえてない。

だけど、監督とスタッフが爆笑したのだけは覚えてる

俺は何を言ったんだろうか？

オーディション終了後、合格者発表がはじまった。

2000人からたった5人が

3人目まで呼ばれた

驚いてる奴

喜んでる奴

固まってる奴

「4人目は

129 木村優也っ！

…えっ?!
嘘だろ。うかった

壇上に登らされ、5人目
がよばれた。

多くのフラッシュとカメラがむけられて

ほかのやつらのコメントを真似して、取り繕ってがんばりますとだけ言った。

会見が終わって家に帰る途中で

「キムーうっ!!」

…キムっ?!俺のこと?

「ね、キム一緒に帰ろっ」

そいつは女の子みたいにかわいい顔したやつだった。

「あれ?僕のこと覚えてない、中村だよ?中村勇氣。」

2番目に呼ばれてめちゃくちゃ喜んでた奴だ

同じ方向だと言っので一緒に帰ることにした。

勇気から一方的な質問攻めにあつた。

「ゆうちゃんは、なんさいなのー？」

ゆうっ?…あ、俺のことだよな。

「10歳だけど？」

「僕と一緒にあ〜っ！」

勇気はバシバシ俺の肩をたたいた。

俺にこれでもかかってぐらい質問したあと、自分の話も同じぐらいした。

なんだかんだで俺たちは似てる境遇でオーディションを受けて、受かってしまったってことだった。

しまいには、「やる気なさげな人が選ばれたのかな？」なんてバカなこと言っただけ笑った。

まだ小学生の俺が働くなんて、信じらんないし。

しばらく他愛もないはなししてたら

勇気が「おりるね。じゃあね」って帰ってった。

気付くとそこは自分の最寄りの隣だった。

なんだ？こんな偶然あんのか？！

家につくと時計は9時を回っていた。

「おかえり〜いっ！！」

ねーちゃんが玄関に飛んできた。

「ただいま、なんかうかつちゃった。」

「あたしの弟だもん」

ねーちゃんは自分がうかったかのように得意げだった。

ねーちゃんかは親戚中でいちばんの初孫なもんだから蝶よ華よと育つてきて

ナルシストだけど、

弟の俺が言うのもなんだけど“わりと”きれいな方だとおもつ。

6つ下の妹と弟は双子で異性とは思えないほど弟が女の子顔。

母ちゃんはいっつも笑ってて幸せMAXな顔。

父ちゃんはすつとしてて、ハーフとよく間違われるらしい

こんな家族6人の極普通の家族からアイドルのたまごが生まれた。

オーディションを受けたけど、何のために行われて、自分がどんなアイドルを目指したらいいのか。

オーディションに勝手に申し込んだからそれぐらい知ってるだろうと2階の自分の部屋の隣のねーちゃんかの部屋に行ってみた。

ガチャっ

「あの、ねーちゃ…

ねーちゃんは勉強机に向かいなにやらパラパラめくっていた。

こっちに気付かないみたいなのでそーっと近づいた

そこには「ジューノ」とか「Men's beauty」とかのアイドルの乗った雑誌からメンズのヘアメイク雑誌まで計10冊ぐらいの本をみてなんやらノートを取っていた

M字前髪は今風イケメンの 必須事項。

色はダークブラウンからキャメルぐらいがベスト

服は

「ちよつとっ！まだダメっ！あっち行って、シッ！シッ！」

両腕をガシツと捕まれてあつというまに外に追い出されて、ドアをバタンっ！

ドアが鼻すれすれでぶつかりそうになった。

ちえっ！ケチ。

でも、ちよつと嬉しかった。

部屋に戻ると妹弟が勝手に俺の部屋に入って遊んでいた。

「ねーねー兄ちゃん、おれねー兄ちゃんがテレビにでてんのみたよっ？おれ、すごいしょー？！」

4歳児はやっぱ「おれ」の「お」が強く、「れ」が弱い例のアクセントが可笑的い。

たぶん、オーディションの合格者発表の会見をみたんだろう。

「そのうちのチャンネル着けても映ってるかもよ?!」

そう言っているとほっぺたに手を当ててきちゃーきちゃーさわいで2人とも嵐のように走り去っていった。

しかし散らかしたなあ、おいっ(- - - #)

ビスケットのふくろ、食べかす、マンガ、クレヨン、色鉛筆、油性マジック、クレヨンでカラフルに書かれた算数のノート…

算数のノート…？

う、うああああああっ!!!!

落書きまみれの算数のノート…orz

「ふたごちゃん？こっちおいでー？これあげるー。」

「わーいなあになあに?」

ノートをみせるとあっとして逃げようとしたがトロくてすぐ捕まった

2人に軽いげんこつをあげた

「悪いとおもったらどうすんの？」

「ごめんねする」

「じゃあ誰にごめんねすんの」

「ノートさん」

…そんな真面目なかおして
わかってねーなあ！おいつ…

「違うだろ？誰にごめんねすんの？」

「クレヨンさん？」

ダメだ、まるでわかってねー…。

「兄ちゃんにだろーがあっつっ！…！！」

「なんだ兄ちゃんにするのか…ごめんね」「ごめんね」

なんだってなんだよ？

まいつか4歳児だし。

許してやった

たしか、引き出しの中に一冊予備のノートがー

…ない。あれ？入ってたはずなんだけどな…

別の引き出しもあけて探っても、ない。

どこだ？

水色の普通のノー…ト？

俺は思い出した。

うちの奴らはみんな自己チューだってことを…。

「ねーちゃんっ!」

さっきとは違ってボタンといきおいよくドアをあけた

「ちょっと何よ、うるさいな」

「俺のノート使ったでしょっ?!」

「ああ、これ？」

「いいじゃんあんたのためのノートだし。」

「よくないやいっ!」

「でも俺のためのノートってなんだ？」

「はい、ノート。」

「算数に使うはずのノートは“俺のためのノート”になって返ってきた。」

そのノートをパラパラめくると、そこには今活躍中のアイドルやモデルたちの服装、髪型、理想体型、心構えなどがびっしり書かれて

いた

ねーちゃんがアイドル雑誌美容雑誌を読みあさってたのはこれを作るためだったのだと思いついた。

「…おねーちゃんありがとうは？」

「あ・ん・が・とおーねー」

嬉しいのと恥ずかしいのと入り交じってちゃらけたけど。ねーちゃんはわかってたみたいだった。

ニヤけたかおを隠しながら自分のへやにかけこんだ。

ノートまた買いにいこ。

昨日のことは夢だったのか？

次の日は月曜日。

普通の小学生は学校に行く

5年間使った黒いランドセルは投げたり、転んだり日頃のわんぱくでキズだらけだ。

これを背負って通い慣れた学校に普通に行く。

今日もこれは変わらないと思ってた。

でも、昨日のことは嘘じゃなかったみたいだ。
顔をつねっても、痛かった。

朝の準備を済ませて、玄関を出ると、同じ学年のやつらが家の前に
20人ぐらい押し寄せていた…

『なーあ！お前、アイドルになんのかよー！？』

『サインちょうだい』

『芸能人にあつたんだろー？』

そんなやつらを見て俺は立ち尽くしてしまった。

なんにも言わない俺の腕をグイッと引つ張る手があった。

ガヤガヤしているやつらの間を縫ってそいつは俺を引つ張って猛スピードで走った。

見覚えのあるその後ろ姿に疑問を感じながらとにかく走った。

学校につくころには汗だくで俺の息はだいぶあがっていた。

やっぱり思った通り勇気だった。

『はあー…はしっ…たなあお前速い…のな。』

『あ、言い忘れてた。おはよーキムキムゆーやん』

勇気は息が全然あがってなかった。

息がやっと落ち着いて改めて勇気に言った
『変なあだ名つけんなよーキムキムとかゆーやんとか』

『…ぷっ、はははは』

『何が可笑しいんだよー』

「だって、髪の毛ボサボサ、汗びっしょりで僕らアイドルなのに
って思ったら笑えてきちゃって、ははは」

「確かに、そっだよな」

俺たち二人は可笑しくなって笑った。

遅れて20人の生徒たちも学校に着いた。

「…はあ…はあなんで、走ってっちゃうんだよっ!」

「そっだよー」

「ってかその子誰？」

いろんな質問が飛び交ったが

「ごめんね？今日優也と体力付けにランニングするって約束してたの、えへ」

あどけない、勇気のその笑顔に数人の女子がぽつと赤くなったのは言うまでもない。

「そうだったんだー？ならしかたないよね」

イケメン好きのおデブで有名な真希が目キラキラさせながら勇気の話かけた。

勇気の笑顔が若干ひきつっているのが俺にはわかった

キーンコーンカーンコーン

チャイムがなって、みんな各自の教室へ散っていった。

ふと、周りを見回すと勇気がいないことに気づいた。

でも、時計をみると8時28分。

自分の教室5ー2へいそいだ。

5-12の教室の扉を開けるとまだ先生の姿もなかった。

「ギリギリ、セーフ……」

すると肩をトントンとつつかれ、振りかえると眉毛をピクつかせた眼鏡の顔がこつちを睨んでいた

「着席してないのはアウトですわよ？木村くん。」

担任の佐藤みどり先生。

推定50代のおばちゃん先生

「は、はぁーい」

俺は急いで自分の席に着いた。

席について早々に先生が

「はい、後ろに背の順でならんでー。」

…なら座らせなかったっていいじゃんかっ!!

と心の中でさげびながらも素直にならんだ。

背の順はつしろから6番目とビミョーな位置。

階段をおりて、くつばこ行って校庭にまた並ぶ。

全校生徒が校庭に集まってまもなく

ピシッと整った白髪混じりの60歳ぐらいのおじいちゃん、ケンチヤンこと真嶋健之助校長がしわがれた低い声でマイクに向かって話し出した。

「ええ…生徒諸君。今日は転校生の紹介と大事なお知らせがあります。心して聞くように。」

校長と入れ替わりに生徒指導部の金子先生が舞台にあがった。

すると、担任が俺にちかよって

「あなたも舞台のしたにいなさい？まあ、行けばわかるわ」

先生に雑にあしらわれながら舞台の横に行った。

すると、横には勇気がいた。

勇気はこっちにちっちゃく手をふっていた。

「ま、こっこのことなんでよろしく」

「なんか最初から知ってたみたいな言い方だな。」

勇氣はにんやりわらってあとはなんにも言わなかった

金子先生は勇氣の名前を呼んで舞台上に上げた。

「中村勇氣です。静岡から来ましたよろしくお願いします。」

「ええ…中村くんは5-2に入ります」

生徒がざわついた

「それから…」

金子先生はそのまま俺も舞台にあげて、

「この二人は、知ってる人もいると思うが、ついこのまえアイドルとして活動を始めた。だから学校でもサポートしていききたいと思ってる。しかし特別扱いはしない。ー」

…「」言つことか。

他にも金子先生はだらだら話して、礼をさせて朝礼は終わった。

そのあとは普通に昼4時間午後2時間授業をつけて合間に給食たべて、

教室の掃除をみんなで作って普通に放課後を向かえた。

「はあ…おわったー。」

勇気の席に目をやると勇気はいなかった

「…いないか。」

ボソっというと、

「だれがいないのさ？ほらいくよあ？」

座ってた椅子をガタガタとゆらされた。

って言うかどこに行くんだよ？

「ほら、初レッスンに遅れたらアウトだよっ！学校みたいにはいかないんだから」

！！

そうだった。

今日のはじめてのレッスんだ。

電車を乗り継いで渋谷のスタジオまでなんとかかたどり着いた。

またもやギリギリ。

他のメンバーはもうとっくのとうにっていた。

「あら〜」

のっぼでなが〜い手足のハデな服の一目でオカマだっとなる先生が出迎えた。

いきなりのド迫力…

「君たちが今日のボクのレッスンを受けるば〜やたちなのね〜ん？
可愛らしっ」

勇気はあの顔をした。

誰にも気付かれない苦笑い。

「おはようございま〜す」

それでも勇気は完璧に芸能界のあいさつをこなした。

俺もぺこっと頭をさげた。

「じゃ、レッスンはじめましょっか」先生はリモコンを持ってやってきた。

ピツとボタンを押すと軽快な音楽が流れた。

「はい、ウォーミングアップだから緊張しないでねー?」

それから15分ウォーミングアップをしたけどこれが結構楽しかった。

…けどキツっ! ! ! ! !

「はい、5分休憩してねー」

「はい、水もらってきたよ」

勇気は全然息があがってなかった。

「あ、ありがとう。」

水のみながら改めてメンバーをみた。

みんなまぶしいぐらいにイケてる…

ってかまだ、名前も勇気くらいしか知らないんだな。

「みんなの名前ぐらい覚えてきたよね？」

こいつ顔色で完全に読んで言ってるな？

「みりやわかんだろ。覚えてないよ。」

ちょっと語尾を強くしたらブスツとふくれて、

「だろーと思つたあ。」

と喋ってスネた。

こつこつ可愛いところに女の子はひかれるんだろつな…。

「え？どしたの？」

「ー？」

気が付くと勇気の頭に俺のが乗ってワシワシと撫でていた。

勇気は照れて真っ赤になりながら離れた。

「なんか楽しそうだね？中村くんと木村くん」

「ほんと。カレカノって誤解を招くよー。あはは。」

いかにもチャラそうな茶髪の細マツチヨとさわやかな黒髪が笑いな

がらからかっってきた。

「同じ小学校だから仲良いだけだよーっ！しかもどっちも男の子ですーう」

あ、早速染めたんだあ守屋くん、相変わらず金城くんは黒が似合うよねー」

勇気は俺に目配せしながら名前と特徴をバレないように教えてくれた。

あ…

思い出した。

チャライのが守屋葵、
さわやかが金城 慧

どっちも3歳上で中2。

最初の印象だと

驚いてたのがたぶん葵

固まっていたのが慧だった。

あと1人5人目は…

「おい、ケビンっ！いつまでそんなかつこで休んでんだ？」

葵の声で振り向くと

きれいなY字で足の爪を見ながらねっころがる丸山ケビンがいた。

イギリスと日本のハーフでたぶん、このメンバーの中でもたぶん一番のイケメン。

ケビンはイケメンだし、バイリンガルだし、ダンスも、歌もうまい。

まるで非の打ち所のない…

…いや、彼には決定的な非の打ち所？があった。

ケビンは少々…いや、とつても天然なのだ。

会見のときケビンは「僕が選ばれるなんて、天と地が180回転したみたいですよ」と真顔で発言したぐらいの強者である。

5人目のケビンは

なぜかオーデイションで受けてるときに大爆笑のしすぎで呼吸困難になって救護室に運ばれたという伝説のもちぬし。

この5人がメンバーか…。

不安と期待がいりまじってなんだか変な気持ちになった。

「さっ！んじゃ休憩終わりてまたはじめるわよ」

その日の練習は午後8時まででつづいた

「じゃ、今日のレッスンはおわりよ。お疲れさま」

……………はあああ〜 終わったあ…

ダンスのレッスンはウォーミングアップより格段キツくて、激しかった。

さすがの勇氣もちよつと息があがっていた。

着替えをしながら

「先生つて絶対オネエ系だよねっ?!」とか「初回からレッスンキツくね?!」とかわいわい騒いでいた

「ねえねえーレッスン何取るか決めた?」

ケビンが不安そうな顔で聞いてきた。

「あー…」

休憩終わりの2分ぐらい前にダンスの先生からこれから来週1週間のうち、2日間のスケジュールは自分で決めると言うことを言われた。

俺、何がやりたいんだろう。

演技、ダンス、アクロバット、楽器、ボイストレーニング。

1週間の中ですべて組まれている

でも、この項目の中で自分がなにを伸ばしたいのかわからない…

「そっかあ、やっぱり優也も選ばれるべきひとなんだ」

…？

選ばれるべき人って…なんだ？

「選ばれるべきひと…」

「おーい、帰ろうよお〜優也あー!!」

ずいぶん入り口に近いところから勇気の呼ぶ声が聞こえて、聞けず仕舞いでもやもやしながら家路についた

すっかり暗くなった外からみる自分の家はなんだかちよつと変な感じがした。

「ただいま。」

…？

返事がない。

まだ部屋にも灯りはついてるし、まだ9時だし、寝てるわけじゃないよな…。

リビングのドアをあけるとお母さんは背を向けて電話で話していた。

「ただいま」

「っツ！…でわまたあとでっ！」ガチャン

「あ…あら、おかえり。」

少しうわずった声は怪しさを増した。

「今のだれ？」

「んー…優也の知らない人よ」

そうなんだ…。

それ以上何もきかなかったがこれが“選ばれるべき人”の謎を解き明かすカギだとは知るよしもなかった。

二回にあがるとねーちゃんの部屋のドアが開いて中からちびたちとねーちゃんの声が聞こえた。

「いい？優也はこれから家にあんまり居なくなっちゃうけど、『やだ』とか『さみしい』とかで困らせないこと。あと、優也へのいたずらもだめ。ミウ、コウわかったね？」

「はいっ！」弟コウはいい返事をしたが妹ミウは口をへんの字にまげながら泣きがおになった。

「だってさあ〜おにいちゃんがさあ〜いないのミウやなんだもん…」

ー ミウ…。

大粒の涙を流しながらなく妹の普段見せない我慢をみて兄責心にグサツと来るものがあった。

「おれだってさ〜いないのやだよ」

コウもつられて泣き出した。

「よしよし、ほら泣かない。そろそろ優也かえってくるよ?」

…!

そそくさと階段を降りてわざと今登ってきたかのように「ただいま」と言っ

ミウとコウはドアを壊れんばかりに思い切り開いて

「おかえりなさいっ!」
と言った。

レッスンから疲れてかえってきて「ただいま」を忘れないようにしようと思った。

ねーちゃんは

「おかえり、たまごちゃん」

「…はあい?たまごちゃん?」

ねーちゃんがまたわけのわからん名前で呼んできた。

ん?この感じは…

…!ああなんだか勇気みたいだな

なんか ねーちゃんと勇気って気が合いそうだな。

なーんてね。

「で、どうだったの？」

「…何が？」

「だからあくレッスンが」

「んー…ド迫力だったよ。」

「あはははーだろうねっ！でもあの人ダンスは一流だから」

…あれ？何でねーちゃんが知ってんだろっ…

やっぱりこれもなぞを解くためのカギだったのだ。

その日は疲れてすぐさま風呂に入って寝てしまった。

そして、次の日。

なんだか昨日のことが気になりすぎて昨夜はあんまりねれなくて頭が痛かった

いまどきの小学生どっかのサラリーマンと一緒に悩みが多いのだ…

選ばれるべき人

その正体を探るため俺はいろんな人に聞いてみることにした。

まずはきのうの話がなんだったのか誰が真相を知っているのか…

………つや？…ゆづやあ……？

「ゆうづうやあっ！！学校遅れるよあっ！！！！」

お母さんの声が耳につき刺さった。

壁掛けの時計を見ると、7：50だったっ！

間に合うか間にあわないかの時間だ…

ヤバイ！また遅刻だ！！

見慣れた町並みを風のように通り過ぎて学校へ急いだ

時間ギリギリで校門までつくと恐いことで有名な佐々木先生が仁王立ちで

こっちをにらんでいる…

「オイ！きむらあーっ！！遅刻だぞ！」

「はっいつ！！！」

猛ダッシュでその場を切り抜けて教室に駆け込んだ。

駆け込んで着席すると同時にチャイムがなった。

はぁ…一安心

「今日も優也はギリギリい」

勇気は俺を見るなりちゃかした

「チャイム鳴る前に座ってたらセーフっ！」

「ま、僕もさっき来たんだけどね」

勇気とふざけ合う間もなく先生がやってきた

そして、

その日は体育、国語、理科、算数、の4時間授業。

難無くこなして、俺は1人で事務所へ急いだ：

「あれ？新星の優也くん？はやくない？？今日は勇気くんと一緒にやないんだね」

俺たちの大先輩、本郷涼耶さんだ。

「はい、本郷さんはどちらへ？」

「俺はこれから、レコーディングと会食ミーティング」

先輩たちはCDデビューや俳優デビューをしてバリバリ活躍している本郷さんにいたってはハリウッドデビューして先日帰国したばかりだ。

.....

はっ!!!

「本郷さんっ!!!」

「ん？」

「選ばれるべき人ってなんだか知ってますか？」

「…！知らないで入ってきたんだあ、意外だねっ！ははは…」

「…えっ？」

「社長に直接聞いてみな？あははは…」

今日の本郷さんはちよつと意地悪だった…

社長なんて下っ端の僕たちには到底会える人じゃないのに…

「あ、木村くんじゃ〜ん！」
メンバーの守屋葵だ

相変わらずチャライ!!!

「おお、おはよー」

「いちばんだとおもったのにーい…」

ちよつとシユンとしたふりをした。

「ねえ、守屋君はさあ選ばれるべき人なの？」

「おはよーい…ちよっ！！」

ケビンと慧と一緒にやってきて口をあんどり開けていた

「やっぱ…そーゆー…かんけい」

自分たちの姿を見ると勇気を抱っこしてるかんじになってた…

「ちっ！ちがーう！！」

みんなに笑われながらも謎に近づいた気がした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4833u/>

アイドルっ!1

2011年10月17日19時55分発行